

Günter Eich に於ける現代詩の道

内 藤 道 雄

1

近代詩，今日なお生きながらえているその残留物をも含めて，つまり現代詩でないもの，に共通するものは，何らかの固定観念に住みつこうとする偏報病的ロマンチズムであり，言葉は，この観念のための祭式にすぎなかった。超越性に関する観念というものは，何も明確な哲学的体系に限らない，可能性の白昼夢，強迫観念，神秘体験，などと名付けられるような場合もあるだろうが，とにかく，こうした観念の廃虚に生まれたのが現代詩なのである。

ドイツで，現代詩の第一走者のように見なされている表現主義も，結局は，観念のパセドウ氏病にすぎない。表現主義者たちは，彼らの主観的観念のための言葉を作りださねばならなかった。彼らは自分たちの言葉を所有していなかったからだ。表現主義者たちが，表現のための言語の嵩を乱暴に増大させ，この行為の中で自瀆的にめいていし，観念を病的に無責任に膨張させていったのに対し，自然の秩序というものを信じた Loerke は，自然と親密な関係のある言葉によってのみ自己の存在を確認しようとした。

Loerke が，社会の中で猛威を振る暴力から，自然の中へ逃避したのは当然であろう。何故なら彼は詩人であったから，彼の観念を守るには，それに相応しい言葉に頼まねばならぬわけである。自分の庭の中でなら，舌の根に苦味をおぼえながらも，調和とか神という言葉の価値を信ずることができたのである。彼が「言語によって，実在形式の中へ連れもどすべき体験」について語る時，人間存在と自然との関係は，神秘的な一元的体験を意味する。「銀あざみの森」は，人間存在の中に，人

間的状況をではなく、神を見ようとする特殊な心的状態、つまり自分を脱出し、超越的な夜にすべりこむ者の意識事実の事物化としてのメタファーであった。

2

Günter Eich は、Karl Krolow, Peter Huchel などと共に、Loerke をその先導者に位置づけているドイツ現代自然詩のカテゴリーに入れて、とりあげられているが、Eich と Loerke の間にも、現代詩人と近代詩人を区別する本質的な距離がある。レールケ的魔術の宇宙は、彼の身をまかせた心的状態が、可能なものとして信じられる限り、その心的状態に支えられつつ存在し得うるのであるが、戦後の現代詩が、みずからの詩的状况を見出したのは、このような体系や神話が、救済の約束を期待しての問いかけと一致するような時代の埋葬式においてであったのだ。

この距離そのものは、いわゆるナチ時代の空白をのみ意味するものではないし、また戦争を引き合いにだして、すませるものではない。

現代詩人たちは、何らかの形で、シュールレアリズムに関係している。あるいは、シュールレアリズムが決定的な仕方で提示したものを体験しているはずである。シュールレアリスト達は、文化の伝統の所与である反省意識としての言語、社会関係の約束としてのシンタックス、という抑圧的障害をとりのぞけば言語は絶対的な現実という自己の真実に戻るのだという事を、言葉そのものに主張させようと試み、言語の自発性、超越性、つまり言語の思想を白日のもとにとりだしたのであった。彼らは、言語が、指示の手投でも、表現の道具でもないという事を、言葉をこうした機能的役割から解放する行為を通して証明しようとしたのである。言葉が、一つの魔力を秘めた存在としての自由を獲得した。ここですでに、意味内容と表現技術といった概念は、前代の遺物となってしまったはずである。

「作家である」という職業を「世界を言語と見る決意」に於て確認す

る Eich は、あきらかにシュールレアリスム以後の詩人であるが、しかし彼は、戦後の廃墟の中で、「在庫品目録」を作るという意識のつつましい確認行為によって、1945年以後のドイツ現代詩の最初の声のひとつとなった。

シュールレアリスト達は、解放され絶対化された言語の中に、全的人間の自由を夢見た。これは要するに、言語を支配し得るといふ尊大な觀念が黒幕であるところの言語観である。これと究極的にはつながるものに、マラルメ以来の頭脳工場の系統もあるが、いづれにしても、すなわち、論理破壊の自動記述であろうが、実験詩の曲芸であろうが、その行きつくところは、言語が何も語らない超越的秩序に他ならないのだ。（この絶望的認識から、突如反転して、言葉に自己の社会的行為によってのみ新しい意味を与えようというレアリスムへ後退していったものも多い。言語はここで再び指示の機能になりさがる。）

Eich は、この絶対をめざす形而上学的な言葉の編物の落す致命的な編目から、その背後に残されたままでいる存在を見るのだ。つまり言語とは無関係に物は存在していることを、彼はまず自分の身の周りのものの存在において確認する。「これは私の帽子、これは私のマント」と数えるのは、多くを失ったのちに、手もとに残された物を惜しむ感傷でなく、人間が物に与えていた価値や意味が崩壊し、消滅した時にも、物の存在は、そういった事とは一向無関係に、存在しているという事実を、まず自分の手もとから確認しようという態度であった。

そして、この具体的に存在が、言葉を待つことなく、謎めいた沈黙のまま触れてくる秘密の近くに人間が位置していることに彼は気づく。

雨ざらしの石の上に

灰じんからとび散る錯綜したしるし

耳鳴りがする、何が私を追うのか。

心や鐘の音の落とした今、

いうまでもないことだが、この「しるし」や「耳鳴り」は、かつての事物と人間存在の血縁関係を意味するものではない。「かけすは、その青い羽を私に投げ与えはしない」。

3

Rilke は、あの事物詩に於て、主観を対象の中へ滲透させる方法を駆使することによって、対象に主体の権利を無料で貸与しようとした。しかし事物は、その存在を人間に委託する必要は少しもないのである。いかなる形をとるにせよ、とにかく認識が事物の存在を完全に捕えるという幻想的体験は、Eich においては終りを告げている。彼は、夜の沈黙の陰険さについて嘆く。「夜の沈黙は、うさん臭い。猫の沈黙 も しかり。彼らはどうしてもういい加減に口を開かないのか。色々知ってるくせに、嘘は馬脚とロバの耳、この二者の間で何でもござれ、美も形体も。」ということは、Eich が、世界を言語と見るという決意をした時に、そしてまさにこの事によって、人間の言語能力の不完全さ、貧弱さを思い知るわけである。

これが Günter Eich の出発点であり、この状況は今日に至るまで、本質的に変わっていない。詩人がみずからの、言葉の貧弱さを、人間存在そのものの条件として捉える時、彼は、言葉を初めて手さぐる幼児の状態にある。「私は、樹木、月、山と言ひ、それによって自分を方向づける子供の状態にあります。」Eich は 1956 年の講演の中で自分を、こう紹介している。

1960 年に、Eich の選詩集を編さんした Walter Höllerer は、あとがきの中で、1945 年当時を、大きなチャンスとも呼んでいたが、内容の全面的崩壊、諸価値の全面的空無化のために果した敗戦の彼割り、現代詩の出発点的状況を、可視的なものにして見せたという点で、詩の危機ではなくチャンスを意味するものであった。今日、詩の危機ということがよく叫ばれるが、Eich の場合、これは「もぐらたち」にとって、焦土よりも、舗装道路の方が、はるかに危機的であるということである。

世界の崩壊、混沌を、Gottfried Beun のような断片の堆積と見るのは感傷にすぎない。この感傷が、「現実など存在しない、存在するのは人間の意識のみ」という態度表明を支えたわけだが、これに対して、Eich が人間存在の位置をもとめる時、それは、例えば社会学が指示できるような時空でないことは言うまでもないが、かといってこの歴史的社会的現実を放棄するために、精神を超越的領域に住まわせ、存在の全体性を一手にひきうけようという態度を意味するわけでもない。自然的混沌は、存在の頑迷な秘密そのものであり、人間は、これについて殆んど何も知っていないのである。戦後の最初の詩集「雨のたより」の第一頁には、

要するに忍耐すること、
鳥の筆跡の秘密もやがてとけよう
舌の裏側で、銅貨を味うこと。

という格言風の詩句が、最後におかれている。Eich は、自分の身のまわりを、無表情に、しかし丹念に、強情に見まわすことから始めるわけであるが、これは失なわれた古い人間を懐古する運動ではない。とはいえ、1955年に発表されたこの「雨のたより」には、抒情的な描写が少くない。Eich が、都会よりは田舎、また都会にあっても土の香りのする対象を身近に見ている点において、たしかにドイツ自然詩人の仲間数えられるだろう。1907年に生まれ、1930年に処女詩集をだしている彼は、例えば「午後四時頃」の、

窓越しの眺め。ぼくが見るもの
の中で、ぼくの愛するのはただ
現在のこわれやすい感情
愛のにくしみのレース編み

といった詩句にも認められるように、自然の中の微細なもの、忘れられているもの、はかないものの存在、小さな瞬間、に対する細心な観察眼を育てて来たのであるが、彼が **Loerke** から学んだもの、というか彼と自然詩の伝統の出会いにおいて、彼が自分のうちに確認したものは、存在に対する無条件の献身であり、そのために必要な愛と抑制心である。「感受すべき現実はない」というのは **Benn** の捨て台詞であるが、**Eich** は「現実をその現出するままに、感受する能力がない」と、ひどく控え目な洞察に終始する。

4

Eich にとって詩作は、探索することである。1956年の講演の中で「私は、どこか他の場所をめざすものを書こうと試みている」ことを打ち明けているが、最近の言葉を引用すれば、「犬の鼻」で、「ペパーミントと女性ホルモンの間にある匂いをかぎつける」ことである。

他の場所というのは、当然のことながら、現在いる場所でないということであるが、その「前人未踏の場所」は、しかし「ヒマラヤ探險や砂漠の冒険」の対象ではなく、目の前の「歩道だとか八百屋の店先とか玩具売り場」であるという。つまりどこでもないという事であり、言語が無効となる言語の背後の沈黙のことである。だから彼は、沈黙が言葉に吸収されて上昇してくる瞬間をのがすまいと、あらゆる試みをかたむけるのだ。

私は始めようとしている
蟻塚を翻訳することを
口をとじて茶を味うことを
韻文の塩をまぶして
トマトを輪切りにするけとを

彼は感覚や脳髓の働きに対する不信から常に言語の背後にかくされた

未知の領域へと身を投げかける。彼の詩作は、五官の知覚するもの、思惟の理解したものが、その背後に隠れているものを、不意に何かの手違いからのようにもらす瞬間をのがすまいとする努力である。

だが、それが何であるのか、そして何になるのか、あらかじめ見当がついているわけではない。自己の存在を位置づけるため、言葉の「三角測量法」に無条件にたのむばかりである。

物の存在は、しかし自己を自分の方から、隠しているわけではない。それは、そのあるがまま即自的に存在している。これに言葉が触れるとき、その限りの側面において、表現であり、思想そのものとなる。Eich はこの現実を「原典なしの翻訳」にたとえる。

5

近代詩人の態度に、よく見られたものは、言葉を越えて、いわゆる神秘的観念の中へひたり込む姿である。「世界を言葉として見る」という出発点につねにとどまる Eich は、このような神秘的観念をあてにしていない。言葉の背後には、何もないのである。われわれが現実として受けとるのは、言語的瞬間におけるまさにその言葉以外の何ものでもないのである。Eich の詩には、言葉が、沈黙の中へ忍び入り、語り得なくなる、いわばみずからの根毛の先をどこまでもさぐっていき、それを切らずに何とかひっぱり出そうという、妙な、夢の中での体験を思わせようなもどかしさがついてまわる。

Eich より八才若い Karl Krolow の詩作には、Eich のそれより器用で軽やかなものがある。というのは、Krolow は、言葉の根を切り取って、生花風にアレンジするからである。しかし、この、ドイツ自然詩とシュールの技法を見事に結合したというような言い方で評価されている詩人は、Eich が現代詩の出発点とした状況以前のものに未練をもっている詩人である。古い意味内容を失って陰影のようになった言葉が、光の中で、しかし常に喪失の感情に触れるやさしい古めかしさがある。

所で、Eich にとって、事物とは、自然の樹木だとか鳥とかに限られ

たものではない。社会的事象や歴史的現実、日常の常套句にも、「世界を言葉として見る」眼は、当然及ばなければならないはずである。

Eich の詩作における技法上の特徴というものだけを取りあげるならば、印象主義的なタッチを指摘することから始めて、若い頃熱心に読んだという **Trakl** から学んだ不協和音的移行を要請する無時間的な眼、更には、シュールレアリズムの言葉の透視力、召喚力を実現する技術、そして **Eich** 独特の、明確な具象イメージとイメージの間にひそむ磁気に感応する聴覚などを列挙することができるだろう。が、これはすべて、未知の領域への探索のために、彼の言語能力を整理し出動させているものであって、技法や意匠が主題でないことは、ここでも繰り返す必要はないかも知れない。技法や意匠を主題にすることに対して、皮肉な調子で、彼は拒否宣言する。「ついさっきまで私は自分を前衛作家と見なしていたが、もうその方の専門家がおいでになる」。

Eich にとって重要なのは、言葉が捉え、測定したものを書きとめることである。つまり木の葉の間、鳥の飛しようの中、夜と昼の接点に於て、存在そのものの核心を定義することである。彼の詩作は、「書類へ」（1964年）、から更に「諸囚と石庭」（1966年）になると、描写的なものがいよいよ消え、それだけ断片的、格言的になり、商人が重要なメモをとってゆく姿を思わせるものさえ見られる。そして1968年に発表した「もぐらもち」では、散文という断り書きがついてはいるものの、詩と散文のジャンル規定ももはや問題ではないかのようである。

6

あの絶望的認識から突如反転して来て、社会の中に戸籍を持たないはずの詩人が、社会に於る詩人の良心的役割りといったような名目で、戸籍謄本を捏造するロマンチックな無邪気さは、一国の首相の資格に、詩人たることを持ちだす議論の馬鹿らしさに匹敵するものであるが、**Eich** の場合の現代詩と社会との関係は、彼の詩作が、社会批判の様相を呈する場合でも、これは、いわゆる文明批評、政治的抗議、などのように歴

史的・政治的展望に立っているわけではなく、むしろこのような展望に立つことそのものに対する根底的拒否が、そうした様相を呈することもあるのというのに他ならない。

ある目的が、必然的なものとしての意味を持つ限り、その為の手段は、その目的によってその手段は秩序づけられる。人は、この目的の正当性を問題にすることもできるし、また手段の是非について言うこともできる。これは社会学的領域の問題である。だが、これらを問題とするために当然たたなければならぬ展望そのものを拒否する者の眼には、すべての活動そのものが異様な現実として自己を開示する。

リアリスチックな文体は
権力に仕える
やけくそに
不文律性典を探して、
そしてメアリーちゃんのいうには
こま切れ肉は股ぐらを選ばぬ

この詩句は翻訳がまったく不可能なのである。Eich は次第に造語の危険を犯すようになるが、この最終行は、「目的は手段を選ばぬ」 *der Zweck heiligt die Mittel* という常とう句の主客を逆転し「手段は目的を選ばぬ」とし、しかも *der Mett heiligt die Zwickel* とグロテに駄洒落化しているのが、ドイツ語ではドイツ人の誰の耳にも、切り離された目的と手段の異様さが、否応なくとび込んでくる。

人がドアを開閉するのは、出入りする時であり、出入りする目的のためであろう。ところが、この時、偶然ドアのきしむ音にとりついた子供が、ドアの開閉をくりかえすと、ドアの社会的機能は失なわれ、ドアの存在はきしむ物としてとらえられる、と同時にドアの開閉も出入りする目的から切り離されて独立したものとして捉えられる。Eich の詩作は、例えて言えば、この子供の行為を言葉で実行するわけだ。「駄洒落一世界

を理解する一つの可能性，おそらく唯一の可能性，控え目でリラ色の」。

詩が，社会に対して，発言するとすれば，それは読者の意識変革への貢献という副作用を意味するわけで，この意識変革も，詩人自身にとっては拘束であろう。Eich は，自分以外のものからの位置付けに同意しない，という彼自身に関わる本質的な態度において，ラディカルなのである。「私が，ネガティブな作家でなければ，ネガティブな指物師になりたい」と彼は言う。何故なら「板よりもおがくずの方が重要」だからである。

《資 料》

Günter Eich :

Botschaften des Regens Suhrkamp Verlag 1955

Ausgewählte Gedichte (Auswahl und Nachwort von Waltef Höllerer)

Suhrkamp Texte 1 1960

Zu den Akten, Suhrkamp Verlag 1964

Anlässe und Steingärten Suhrkamp Verlag 1966

Maulwürfe, Suhrkamp Verlag 1968

Literatur und Wirklichkeit, & Akzente, 3. Jahrgang 1956

Oskar Loerke :

Gedichte und Prosa, 2 Bde., Suhrkamp Verlag 1958

Gottfried Benn :

Gesammelte Werke in 4 Bde., Bd I, Mimes Verlag 1959